
ツキシマノマモリガミ

おいたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツキシマノマモリガミ

【Nコード】

N7691X

【作者名】

おいたん

【あらすじ】

学園都市つきしま。別名撒き餌、憑き島。魔物を無限に呼び寄せ、この街を守るために、刀を振るう青年と、青年を主と呼ぶ魔物の物語。

ツキシマノマモリガミ

学園都市、つきしま。

国立槻島大学を中心に、国の、或いは企業の研究所が50以上集まる「知」の集積地だ。

霊験あらたかな槻島山の裾野を区画整理し、人の手によって「つくられた」街。

街には大学に通う学生1万人と、研究所の職員とその家族、そして彼らを相手に商売を行う人達が暮らしている。

表の顔は学生の街つきしま、だが実は人々に知られていないもうひとつの顔を持つ。

撒き餌、憑き島。

事情を知る、口の悪いものはこう揶揄する。

セイネン

つきしまは人の手で作られた街だ。計画的に区画整理され、走る道路は限りなく直線に近い。

全国でも有数の敷地面積を誇る大学が一番北側にあり、大学から南に一本の大通りが延びていて、その両側に人々の生活する街がある。奈良時代の平城京が羅生門から平城宮まで朱雀大路が延びていて、左右に右京と左京があったのとよく似ている。そして大通りに近いほど地価や家賃が高い、というのも似ている。

そんな街の大動脈たる大通りを、1台の軽自動車が走っている。運転手は青年、槻島大学の4年生だ。早朝のためすいている大通りを抜け、大学の敷地内に入る。駐車場に車を停め、研究室に向かう途中に見た腕時計は、まだ6時を少し過ぎたばかりだった。

研究室に荷物を置き、ノートだけを持った青年はもう一度車に乗り込む。この大学は広い。歩いて移動するのは面倒だ。講義棟や研究棟のあるここから10分ほど走ったところで、目の前にひらけた景色が広がる。ここは青年の所属する農学部を管理する、農業技術センターである。ここだけで東京ドーム3つ分の広さがあり、その一面に目的地であるビニールハウス群がある。卒論の研究材料であるトマトの管理観察をするのが青年の日課だった。

自分専用のビニールハウスに入り、ミストを撒く。温度や湿度を記

録し、ハウス内のトマトをチェックし終えたころには8時を少し過ぎていた。今日も生育にとくに異常はなく、順調だった。このままいけばいいデータがとれそうである。

来た道に戻り、研究室に戻ると、自分の名前のかかれたプレートをひっくり返し、「出勤済」であることを示す。口うるさい教授はまだ来ていないようで、青年は安堵した。朝から小言を聞くのはうんざりだ。遭遇する前に、講義棟に移動することにした。

「かずちゃん！」

聞こえたと同時に青年は背中に激痛を感じた。痛みを堪えながらゆっくりと振り返ると、満面の笑みを浮かべた女の子が立っていた。

「いちいちなぐるな」

「ねーかずちゃん今からご飯？」

「・・・スルーもするな」

「今からご飯なの？」

「・・・そうだけど。」

この女の子は水谷みどり。小柄でショートヘアの彼女は、女性というよりも少女といったほうがしっくりくる。いつも元気で表情の豊かなみどりは、動物でたとえるとリス。性格はとても強引でマイペース、青年はいつも振り回されている。ちなみに彼女は同じ学部の1学年下で、3年前彼女が入学してきたときに知り合った。ちゃん

付けで呼ばれるのは納得していないが、いくら注意しても訂正しないためもうあきらめた。

「じゃ学食一緒にしてもいいよね？」

「いい？つて聞けよそこは」

今は2限目が終わった直後で、青年も食堂に向かうところだ。

「お前いい加減彼氏作って彼氏と昼飯食えよ」

「彼氏？彼氏ならできたよ」

「・・・えええ」

聞いてないとか、だったら彼氏と、などなど次々と湧いてくる文句を飲み込みながら、青年はあきらめる。こいつのことだから言っても無駄だ。彼氏さんも苦労することだろう。俺とこいつを見て変な勘違いをしない人だといいな。

「いい人か？」

「うんいい人」

「そうか、ならよかった。」

そのあとも、彼氏との馴れ初めなどを聞きながら昼食をとった。どうやらチャライ男ではなさそうで安心した。みどりは笑顔が可愛らしいからかモテる。だが感情の起伏が激しいため喧嘩をすることも多く、長続きしないようだ。うまくこいつを操縦できる相手が見つ

かればいいのだが。

「それじゃまたな」

昼食を終え、みどりと別れた青年は研究室に戻った。今日は午後に授業は入っていない。院生の研究の手伝いを頼まれたので、それを片付けたら帰る予定だ。

ディスプレイを見つめる目が霞み始めたころ、頼まれたデータ入力が完了した。院生にUSBを渡し、礼に夕食でもと言うのをやんわりと断り、帰る支度をする。予定より時間がかかったようで、19時を過ぎていた。

研究室をあとにし、急いで車に乗り込み、大学の敷地を出た。

青年の「昼の顔」はここまで。ここからはもうひとつの顔になる。この青年——内田一也は槻島の守り神と呼ばれる、国内最強の退魔士である。

タイマシ

一也は軽自動車ですばらく走ると大通りから外れ、とある大型屋内駐車場の2階に車を停めた。ここは昼間、街に繰り出す人間が利用する駐車場のため夜間は閑散としている。

それでも人目を気にしながら車を降りた一也は、立体駐車場の階段を上り3階へ移動した。先ほど駐車した場所のちょうど真上に停まっていた高級車の横まで来ると、再度人の気配を確認した後、ロックを開けて乗り込んだ。

先ほどとは段違いに音と振動の少ない車内で、一也は焦りの表情を浮かべながら帰路を急いだ。

日本には古来より、「人ならざるもの」が出現する。伝承に伝わる妖怪などの魍魎魍魎だ。そして、50年ほど前に存在が確認された動物型の異形。これらを総称して「魔物」という。

という、といっても一般人には知られていない。普通の人間には魔物を視認することはできない。よって対策もとれない。国は、国民に魔物の存在を明かして得られるメリットはほぼなく、無用な恐怖心を煽るよりは存在を隠す方が良策、と判断した。

そして、魔物に対して全くの無防備である国民を守るために、ひとつの組織が誕生した。

特別災害対策室

「特室」と略されるこの組織、魔物の存在を秘匿するために魔物という言葉の名に冠しておらず、偶然特室の名を目にしても中で何が行われているかを知ることができない。

特別災害対策室には、伝統的に霊能力者と呼ばれてきた陰陽師や祈祷師、イタコや僧侶などが集められた。そして実際に魔物に対してどの程度の対応力があるのかが試された。

結果だけを述べると、まず魔物を視認できた者が全体の5割、離れたところからでも存在を感じることができた者が3割だった。そして魔物を退治できる——退魔できるものは全体の5分、数にして100人という少なさだった。

期せずしてインチキ霊能力者の駆逐にもつながった特別災害対策室の発足は現在からおよそ40年ほどむかしのこと。魔物からの防衛は、国民の知らないところで国の力で行われることになったのだ。

高級車に乗った一也は、つきしまで一番の高さを誇る高級マンションへと入っていく。ほかの住民のものとは区切られた専用の駐車ス

ペースに車を停めると、最上階——一也の部屋まで直通の専用エレベータへと乗り込んだ。

退魔師の給料は高い。高いなんてもんじゃない。一流の退魔師の時給は100万を超えるとさえ言われている。危険であり殉職率が高いこと、秘匿性が高いこと、人材が極端に少ないことなど理由は多数あるが、彼らの収入は一般人のそれとは桁がいくつも違っていた。

そして一也が好きでもない高級車に乗り、高級マンションに暮らさなければならぬわけが、開いたエレベータのすぐ前にある、部屋の扉の先にあった。

テンスイ

一也は部屋の扉の前に立ち、深呼吸をした。自分の部屋だということになぜこんなに緊張しなくてはならないのだろうか。

セキュリティの虹彩認証システムを解除し、扉を開く。

「ただいまー・・・」

「遅かったな主^{あるじ}」

玄関に入った瞬間にかかる声。

「テン、怒るなって」

玄関には真っ白な狼が仁王立ちしていた。

この狼はテンスイ。一也の夜の仕事のパートナーだ。

「主は今朝、7時には帰ると言っていた」

現時刻は8時を少し過ぎたところだ。

「なのに主は…「わかった!」」

「わかったからまずは家にあげてくれ」

「・・・まったく。」

まだ言い足りないという表情をしながらも、テンスイはちょうど一也の顔の高さにあった頭を下げた。そう、テンプクは大きい。体高は160cm、全長は3mをゆうに超える。そんなテンスイの頭の上に一也はのしかかる。顔にかかったタオルのようになりながら、一也は体の力を抜き、ほっと息を吐き出す。

帰ってきた一也をテンスイは必ず頭に載せる。昔、一也がテンスイに抱き着いていた幼いころの名残なのだが、これを拒否するとテンスイは拗ねる。朝から放置されていたテンスイにとってこの触れ合いはなにか大事な意味があるようだった。

テンスイは頭を持ち上げ、一也を載せてリビングへと移動した。一也は足をぶらぶらさせながら運ばれている。恥ずかしいなどと言いつつも、もふもふした毛並みに顔を埋めているとなんだか癒され、一也にとっても満更でもないようだ。

「な、テン。なんでいつも鼻すんすんさせるの?」

ソファアに降ろされた一也が聞く。運ばれるとき、テンスイの鼻はちょうど一也のおなかのあたりだ。

「・・・。」

「え!?! なんか答えられないことでもしてるの?」

「気にするな主。特に意味はない。」

実は女のおいがしないかどうかチェックしてる、などと正直に答えることはできないテンスイだった。ちなみにテンスイはメスだ。

釈然としないものの、一也は立ち上がって夕食の支度を始めた。後ろからテンスイが、7時に帰ってきていたらもつと主に触れていられたのに、今日は毛を梳いてくれるのではなかったのか、などと文句を投げてよこしていたが、いつものことなので無視する。

遅れて帰ってきたときのテンスイはきまって機嫌が悪い。一緒にいられる時間が減るのが気に食わないようだ。同じ部屋に暮らしているのだから、一緒にいる時間が1時間や2時間減ることくらいどうということはないだろう、と言ったら「主は何もわかっていない、馬鹿だからしかたないがな」と長い沈黙のあとに返されたこともある。溜息のおまけつきでだ。

夕食の準備はすでに済んでいる。というのも、お手伝いさんが作ってくれるからだ。料理好きの一也としては、自分の好きなものを自分で作りたいという思いがあるものの、学生と退魔師の二重生活を送っている彼には家事に割く時間がない。そして体が資本の退魔師業、栄養管理が必須であり、専門の知識を持ったお手伝いさんをお願いしているのだ。もちろんお手伝いさんもちら側の人間——つまり特別災害対策室（特室）の息のかかった人間である。毎日この部屋に来て、掃除・洗濯・夕食の支度をしてくれる。それがおわる

と一也が帰ってくる前に、テンスイに急かされるようにして帰る。
テンスイ曰く「私と主の邪魔をするな。」

ボリユームのある食事を平らげると、一也はお手伝いさんの置いて
いった特室からの書類に目を通す。この書類には特殊な仕掛けが施
されており、魔物を視認できるものでないとただの白紙に見える。
一也個人宛ての書類だとさらに複雑で本人でしか解除できないセキ
ユリティがかけられるのだが、今日の書類は退魔師全員への連絡だ
ったようだ。

「^{あるじ}主、こっちに座れ」

テンスイから呼ばれる。こっちとはテンスイの傍ということで、器
用にも、横たわったテンスイの前足と後ろ足の間に座布団がしかれ
ている。いや、敷いた座布団を囲むようにテンスイが横たわったの
か。

「はいはい。」

言われるがまま、座布団に座り、テンスイを背もたれにしてくつろ
ぐ。書類の続きに目を通してながら、背中から伝わるテンスイの体温
を心地よく感じる一也だった。

ちなみにテンスイは夕食をとっていない。そもそもテンスイは食物
を食べない。動物ではないからだ。

テンスイは魔物である。しかも、現在の特室では最強と呼ばれる内田一也にしか退魔することのできない最高位の魔物なのだ。

ヨルノオシゴト

一也にしか退魔できない、と言っても一也がテンスイを手にかけてよ
うなんて考えるわけもないので、実際にできるかどうかはわからない
のだが。

「テン、それじゃまたあとでな」

言っで一也は寝室へと向かう。日付が変わってからの退魔業のために
仮眠をとるのだ。

「^{あるじ}主、安き夢を」

寝室の扉が閉じるまで一也の後姿を見つめていたテンスイは、忙し
い一也が少しでも多く体を休められることを願うのであった。

およそ3時間後の深夜1時、一也とテンスイはマンションの屋上に
いた。

地上から50メートル以上の高さにあるここは静かだ。時折吹く強
い風の音の他には何も聞こえない。濃い闇の中、遠くに目を移せば
駅周辺の繁華街の灯りがばらまかれた宝石のように煌めいているの
が見えた。

一也は屋上に敷かれた芝生の上に胡座をかくと、目を瞑る。外を向いていた意識を自分の体の内側へと向け直し、じっくりと視る。

暗く、古い森をかき分けながら進むように、体内の奥深くまで意識を潜らせると、ふいに巨大な泉が現れた。泉の真上から水面に向かって少しずつ圧力をかける。すると今までガラスのように平らだった水面にさざ波が立ち始め、ゆらゆらと揺れる。さらに圧力を増すと、さざ波は大きな波となり、泉の縁からは水がこぼれ落ちた。

こぼれ落ちる水の筋ををすくい取り、流れを操ると、体の中心から外側へと押し流していく。みぞおちの下を出発点に心臓、首、脳へと水は駆け上り、そして手足の付け根から末端へと滑り降りる。手先つま先まで行き着いた流れはそこで折り返して体の中心へと集まり、太い川となって再び泉へと注がれる。ドクドクと泉の縁から溢れ、体中を循環して戻ってくる水の流れが安定した頃には、泉は水面から淡い青白い光を発していた。

一也が今行っているのは、霊気循環。鳩尾の下にある霊気のプールから、霊気の流れにして引き出し、体の各所へと流して漲らせる作業だ。

エンジンの試運転をするように、始め低出力で回していた循環を徐々に速めていく。流れの筋も太くし、霊気を増やす。やがて泉の縁から滝のように霊気がこぼれ、奔流が体中をめぐるようになるころには、一也の体全体が青白く発光していた。

「美しい…」

靈氣循環は一也の毎日のルーティンワークであり、見慣れたはずのその光景にテンスイは思わずため息をついていた。人一倍靈氣の操作の巧みな一也は、淀みのない循環の流れを作り出せる。つかえがないためその流れは非常に高速で、靈氣はどんどんと活性化されていく。並みの退魔師では蛍ほどの光も起こらないのが通常であるなか、一也は見るものが圧倒され、息を飲むほどの強く美しい光を纏っていた。

「テン、準備できたぞ」

しばらくののち、靈氣循環を終え、愛刀を左手に持った一也はテンスイを呼んだ。

「では行くか主」

「ああ、今夜は南から回ろう」

「あい分かった」

二人は屋上のへりに立つと、夜の街――仕事場へと飛び降りた。

屋上から飛び降りたふたりは、すぐにテンスイが魔力で作りだした足場に着地し、そのまま弾かれたように前方へと跳躍した。数百メートル跳んだ二人は再び魔力の足場に着地し、沈み込んだ反動を

利用してさらに加速しながら前方へと跳ぶ。これを繰り返しながら移動し、1分40秒後にはつきしまの街の端に到着していた。

「どうだ？ テン」

「いまのところ何も気配はないな」

「今日はできれば何も出てほしくないんだけどね」

「そう思い通りにも行くまい」

「ですよねえ」

上空の足場の上で二人は街の様子を見る。こうして魔物の一番出現しやすい深夜2時の前後の時間を毎晩巡回し、魔物が出たと同時に急行し、被害の出る前に退魔するのだ。ちなみに探査はテンスイの役目だ。一也が探査をすると一番近い位置にいるテンスイという存在がとてつもなく大きな反応を示してしまうので、できないのだ。

「10分待機してなにもなければ西のほうにまわろう」

「あい分かった」

そういうと一也は腰を下ろし、テンスイは伏せた。二人とも空中である。一也は特室から支給されている隠遁用の呪具を使用しているため、発見されることはほぼない。テンスイは魔物なので、一般人には姿は見えない。見えたらその人には特室からのスカウトが行くだろう。

「主っ」

「おっ。来た？」

「ああ、複数だな」

「距離は？」

「5キロ弱」

「遠いなー。ランクはわかる？」

「もう少し近づいてからだな」

「おーけー。分かり次第教えて。1分半で行くぞ！」

ニュートラルにしていた霊気循環の回転数を跳ね上げながら、一也は足場から飛び降りた。

マモノトノタタカイ

霊気、はすべての人間がその体内に宿す、エネルギーである。

一般人が普通に生活する上では使用することはない。己の内側に在る霊気の存在に気づき、扱いを体得し、初めて有効に使うことのできるエネルギーなのだ。一般人からしたらあっても意味のないものである。使い方がわからないだけでなくそれが体内に有ることも知らないのだから。

霊気を多く体内に保持する人間を、霊力が高いと評するが、その霊力の大小は退魔師であるかないかに関係しない。つまり、魔物を視認できない一般人が莫大な霊力を持っていたり、逆に退魔師が平均よりも遥かに少ない霊力しか扱うことができない、ということも少なくないということである。

霊力の大小は、それだけでは魔物を視認する、といった退魔師の資質を顕現するかどうかには関係がない。霊力が高いだけでは退魔師にはなれないのだ。だが、ひとたび退魔師となれば、その霊力の大小は、そのまま退魔師の力の優劣に直結し兼ねないほどの強い意味合いを持つ。

「あるじ主、様子がおかしい」

「どうしたっ？」

「魔力を感じるが、範囲が広すぎる…」

「複数だからだろ？」

「いや、私もそう思っていたが感じる魔力は一種類。同一個体だ」

「てことは分裂できる種、あるいはこちらを攪乱するための術か…」

「後者だと面倒だな、主」

通常、術が使えるような知識レベルや判断能力の高い魔物というのは非常に稀だ。

「まったく…術が使えるようなできた子は、うちみたいなどこじやなくてもっとランクの高いとこいけよなっ…留学でもしてろっ！」

「違いないなっ」

ふふ、と苦笑いを浮かべるテンスイ。

二人は目的地を目指し、空中を高速で移動中だ。レアな事例になる可能性が浮上し、一也は文句を言う。面倒だから、ではない。いや、それもあるが、退魔に手間取ると被害者が出る。ただ退魔するのではなく、被害を出す前に片を付けるのが一也に求められている仕事だ。

「テン、別れた魔力は本体と術による分身とで区別がつかないか？」

「残念だが難しいな。」

「術だとしたらかなりの腕前だな…。分裂可能な種であってくれ…」

テンスイの探知で、距離があるとは言え識別できないとなると、術は高度なものであると言わざるを得ない。

「あと少し、近づけばランクがわかる！……………」

っ！！止まれっ！！主っ」

テンスイが叫んだと同時に、一也は全身に急制動をかけて止まった。隣を見ればテンスイが険しい顔をしている。どうやら望んでいないケースであるようだ。

「高位だ。間違いなく。この距離なら主の接近に気付いている可能性もある」

「まずいな…。

この術はおそらく用意してきたものだろうな。俺のこと知ってて来てるのか。てことはこの術による攪乱は……

時間稼ぎか…」

「目的はなんだ？」

「ただの食事、じゃあなさそうだな」

退魔師は、霊気を使って魔物を滅する。

だが、霊気そのものは高位の魔物にとって補食の対象となる。

例えるなら電気と動力。電気があるだけでは動力を得ることはできない。電気をモーターに流して初めて動力が発生する。

その電気を動力とする変換器たるモーターを退魔師は必要とするのだ。

霊気だけでは退魔の力を得ることはできない。霊気を変換器に流して初めて退魔の力が発生する。

或るものは呪具と呼ばれる道具を使って、また或るものは呪文や陣

を使って、ただの靈氣に浄化の力を持たせ退魔を行う。

靈氣を使って退魔する反面、靈氣は魔物の補食対象。この一見すると矛盾した関係こそ、一也がここつきしまで通常の退魔師より多大な苦勞を強いられている原因だ。

「目的も不明、本体の居場所も不明ときた。これは動きづらいな」

「どれが本体か分かればいいのだが……」

しらみつぶし……か？」

「それも敵さん思い通りって感じだな」

ここは繁華街と比べて深夜の人通りが少ない地区であり、魔物の目的がおそらく靈氣の補食ではないと判断したため、直ぐに被害が発生する可能性は低いと考えるが、その先に魔物の何かしらの目的があり、より大きな被害を引き起こしそうな予感がして、一也は解決を急ぎたかった。

「いや、焦るな俺。状況を正確に把握しろ、敵の考えを読め……」

「…。」

逸る気持ちを抑え、最初の最良の一手を導き出すために顎に手を当てながら唸る一也。

様々な未来の姿が脳裏に浮かび、そのひとつひとつにバツをつけていく。現状から分かることを判断材料にして膨大な未来をふるいにかけて、可能性の最も高いものだけを抽出していく。

尋常ならざる頭脳の処理速度で思考を続ける一也の姿をテンスイは黙って見つめていた。

彼女は己が主の能力に全幅の信頼を寄せている。いまはただ、これから出されるであろう指示に備えるのみだ。

「テン」

数瞬ののち、一也が動いた。

「散らばる分身の中で、群れの外側にいるやつの座標を教えて

「北が5985―235、北東5980―280、東が…」

一也は聞きながら頭の中に開いた地図に正確にマッピングしていく。八方向すべて確認すると、ある地点を中心に、半径1キロメートルほどの円になることに気付いた。

やはりか、と呟く一也。

「本体の位置。心理的にも作戦成功確率向上のためにも外周上はない。中心に置くような稚拙なマネもしない。ほぼ円であることが怪しいが防衛ラインを兼ねていると考えれば納得もいく。俺がテンと行動を共にしていることを知っているのだろう、二手に別れての手薄な場所への挟み撃ちを警戒したなら円陣にしたのも頷ける。」

「ど真ん中は稚拙か？守りは一番厚い場所だ」

「どうもこの魔物は用意周到に見える。慎重なやつだ」

「ふむ」

「分身の分布に気付いてど真ん中を狙うことも想定してる。左右どちらかにずれた場所にいるだろう。」

…まー予測の域を出ないけどな」

「私はいつでも主に従うぞ」

「さんきゅ」

ならば、と一也は次にとるべき行動を定める。中心より右か左か。どちらににいるか。考えたくないがどちらにもいなかったときはどうするか。

「テン、この方角だ。一直線だ、行ってくれ。左担当な。俺は右を担当する。」

テンスイの頭を20度ほど西に押し、傾ける。

「最速で行こう。こちらが動くと同時に向こうも動くはずだ。攪乱のためにダミーの分身も動かすだろうが、本体との動きにわずかもラグが生じるはず。そいつが当たりだ」

「あい分かった。恐らく私が当たりをもらうぞ。今日は朝の占いで一位だったからな」

「お前星座あったっけ……」

軽口を叩きながら体勢を低くし跳躍の構えをとるふたり。霊気循環の燐光が一也を包む。

「2…、

1…、

号ッ——」

ドゴンッ

爆発音とともに弾け飛ぶように走り出したふたり。

指示した直線上を数センチも違えることなく、糸を引くように進む。

300メートルほど近づいたとき、テンスイからの念話が届いた。

「主、良い知らせと悪い知らせだ。

主の推理は当たりだ、本体と分身は動きのラグで判別できた。

だが残念なことに――

本体は主の方にいる」

「俺にとっちゃどっちも良い知らせだよっ！」

ほくそ笑みながら愛刀の鯉口を切る。霊気を十分に流し込みながら抜刀の構えをとった。

「6秒で接敵」

テンスイの知らせと同時に魔物の姿を視認した一也は速度と構えをそのままに突っ込んだ。

一歩

二歩

移動速度と鞘滑りを利用した神速の抜刀が生み出した一撃が、魔物

の首を飛ばす

そう思われた瞬間――

ギヤアアアアン――！！

轟音が、鳴り響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7691x/>

ツキシマノマモリガミ

2011年11月15日02時31分発行